

「目なれにし故郷の庭もやうかはりて、月にかかやく露の玉も、身にふることいかばかりなぞ、花もふさへくるし。」

座敷囚てふものにたしこめて、猶、うから、やから、夜ひる、かはるく二人三人してぞ守れる。ここよりも、月のおもは見えずして、たい庭にてらす影のみこそ見ゆれ。かくれ家にもおしたりし、山邊の庵など、をかしき頃はひなめるを、かきたえて行かぬ間に、月のさかりも、過がたになりぬるなど、とりあつめてぞおもふ。

我がいほの月も、さびしど、すみぬらん、ゆきて居待の人もなければ。

「ゆふしでに、老がいのちをかけまくも、かしこき御世をいのる頃かな。」と、國家の爲に餘命をささげんと決心せし尼も、この景に對しては、さすが

に、久しくすみなれし山莊のおもひ出でらるるも、人情の常なりけり。(つづく)



文苑

古茂藏

露國 イバン、クリロフ 原作
日本 新保 磐次 続案

或る日、乞食の古茂藏は門並み貰ひあるいて大分疲れたから、町はづれの道ばたに腰かけて、獨言を始めた。

『世間の人はなぜあんなに慾張つてるだらう。立派な風をしてゐて一文や二文の錢を、快く呉れる者はない。溜まれば溜まる程汚ないとは』

よく云つたものさ。あの横町の惣助などは別してひどい奴だ。あいつも一、頃は十分お錢を溜めたさうだが、賢いものなら銀行へでも預けて大丈夫にして置くのだ。處が、あいつめ、一時にドカリと儲けるつもりで、蒸氣を一ぱい拵へて、靴手船の商ひと出かけたところが、ドッコイそう旨くはいかない、船は難船する、荷物は沈む、イヤハヤ散々の始末で、やつぱり元の空阿彌さ。

と云ひながら、蓬蓬と延びた鬚を撫でてわざ笑つた。

『そこへいっちや此の古茂藏などは慾のないものさ、はんの今日食べて着てゐるだけあれば其の上の望はないのだ。併し、そんな正直者には中中福は廻つてこず、アア世の中はいやだい

やだ。』

と愚痴をこぼしながら、うとうと眠りかけると、

『古茂藏、古茂藏』

と呼ぶ者があるから、はつと目をあげて見ると、誰わらう、福の神の隊長大黒様が大さな袋を背負つて、にっこり笑つて立たせられた。

『古茂藏、そちがあまり正直無慾なゆゑ、金を投げて遣はす。』

古茂藏は寢耳に水ではない、寢耳に金だから、驚くまいことか、額を土にすり付けて、

『お有り難う御座ります』

大黒様はくつくつお笑ひなさつて

『これこれ古茂藏、そちは今日から金持になるのだから、其の乞食調子はやめるがよい。』

そこで其の面桶をここへ出すと、此の袋の金を

わけてやる。しかし、面桶の中に入つた金だけがそちに授かつたので、外へこぼれたのは、塵になるぞ、よいか、わかつたか。

『有り難う存じます、よくわかりました』

古茂藏は天に歡び、地に喜んで面桶を捧げた。

『そんなら氣を付けろよ、そちの面桶は大分穢が緩んで居るやうだぞよ』

と云つて、大黒様は徐かに袋の金をおわけなさると、チャラチャラと音がして金貨の流れ込む心持、イヤハヤ何とも譬へやうがない。

『どうしや、もうよからう』

『どうぞ今少し……』

『底が抜けはせぬか』

『なかなか』

金貨の泉は再び流れ込む。面桶はだんだん持ち重

りがして、古茂藏が手はふるへ始めた。

『そちはもう是で國中第一の金持だぞよ』

『へいへい……エー申し兼ねましたが今少し、せめて一つかみだけ願ひたう存じます』

『これはせぬか』

『今少しくらゐは大丈夫で御座ります。』

金貨の泉が三たび流れ込むや否や、面桶の底がボンと抜けて金貨は土の上にバラバラと落ち、忽ち塵になつて仕舞つた。古茂藏はアツとばかりに目を覺まして、あたりをキョロキョロ見廻はし、

『アー惜しいことをした、それも大抵の處で銀行へ預ければよかつた。』

(完)

月前竹

東くめ子

月すむ宵の窓のへに 軒端の竹の影落ちて